

---

## 巻 頭 言

---

社会福祉法人日本ライトハウス

理事長 岩橋 明子

### 〈海外事情あれこれ〉

世界盲人連合（WBU）の第3回総会が1992年11月エジプトのカイロで開催された。参加国108参加者500で一応盛会というべきであったものの、国連諸機関や国際援助団体の代表も少なく欧米特にアメリカの力入れがあまり見られなかった半面、アフリカ諸国を中心とした開発途上国からの窮状報告や援助要求のみが目立つ内容であった。その中で気付いたことを少し紹介しておきたい。

先ず台湾が正式に中国の一部として国家代表と認められたことがある。これまでは一個人として準会員であったため投票権もなかったが、台湾側からの要請で中国、香港、WBU事務局長が話し合いを重ねた結果、中国の国家代表6名のうち2名を台湾からだし‘China’として登録されることに決定した。長い間複雑な関係にあっただけに一応平穏に決着したことは喜ばしいが、1997年以降の香港のこともあり、当事国の人達の思いは様々であろうと推察される。

決議の中では特に点字の普及、国連白杖の日、高齢者問題対策部会の設置などが取り上げられていた。高齢者問題はすべての国で深刻になっており、先年奈良・京都で開かれた世界盲老人会議の意義が大きく評価されてこの決議となったものである。開発途上国の多くが将来のある子供達や現実の生活に直面している年代層の訓練すら充分でない中で、老人対策までは到底手が届かない状態にありながらも盲人口の中に60才以上の占める比率は増大していることはもはや無視できない事である。

10月15日を「世界白杖の日」として世界各国で一斉に社会啓蒙や募金その他の活動をしようとしたのはもう随分以前のことで殆どの国がこの日を中心に運動をしているが、さらに「国連白杖の日」としてより強い意味を持たせようとした。日本ではまだ10月15日のことは取り上げられていないが、視覚障害者の自立・行動の自由などの点からでも何か考えられるのではないかと思われる。

点字離れはわが国でも指摘されていることで社会の高齢化が進めばこの傾向は一層加速するのではなからうか。点字の必要性や価値は今更改めて言うまでもないことであるが、中高年になって失明した人達にとっては点字の習得は容易でないことも事実である。しかし、今日アメリカではもっと深刻な問題として点字指導の欠如が取り上げられているようである。1993年1月7日にAFBの主催で点字識字週間の記念行事として開かれた記者会見の内容が送られてきた。出席者はAFB会長カール・オーガスト、クリントンゴア移行チーム障害者関係コーディネーターのボビー・シンプソン、点字識字改正法起案者ポール・サイモン上院議員、盲人協議会代表オーラル・ミラーの各氏であった。

コンピュータや音声付き機器など色々と開発されて視覚障害者の機会の平等が推進されているが、反面点字の指導が充分になされていないと言う。理由は点字指導者の不足と統合教育の普及が挙げられている。例えば、アメリカ50州の中で何等かの形で点字教師の養成をしているのは16州にすぎない。一般校の教師に十分な点字指導ができるわけではなく、しかもすべてのことを一般児と同じにしないと差別と見なされるため教科書も同じものが与えられる。点訳してもイラストや絵が多くて文字説明が少ないので理解しにくいし、本来の字を覚える前に省略点字を教えられる。もっと組織的に段階を追って指導しなければ点字の習得はできないことが看過されているのである。その結果、学校を卒業するとき視覚障害児の88%は点字について非識字者であるという。これは就職にも影響し、現在就職している盲人の91%が点字の読み書きができるのに対し、失業者では64%が点字を知らない(因みにアメリカの盲人失業率は70%)。

諸般の事情も点字の条件も異なる日本でこうした危機がくることはないかもしれないが、アメリカでなぜここまでの状況になってしまったのであろうか。「耳から聞いているだけではスペリングは覚えられない。スペリングを知らないとタイプもコンピュータも使えない。これでどうやって仕事ができるのか」というオーガスト氏の言葉はまさに真実である。世界で最もメインストリーミングが徹底したアメリカであるが、一方でこのような手落ちがあったわけで、新しいものの導入には万全の手回しや配慮が先ず必要であることの一例であろう。しかし、これから本格的にこうした方向に進むであろうわが国の場合、色々な国の経験や失敗を参考にできる有利さがあるわけで、本当に視覚障害者・児のためになる方向へ賢明な迅速な思い切った動きがなされることを願ってやまない。